
人魚姫の生まれ変わり

那珂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚姫の生まれ変わり

【NZコード】

N8166U

【作者名】

那珂

【あらすじ】

私は人魚姫の生まれ変わり。泳ぐのが大好きで、負け知らず。でも勝負事が嫌い。さらに男も嫌い。そんな私に近づく男の影生まれ変わりシリーズ第2弾。『白雪姫の生まれ変わり』の続きになりますので、先に上記をお読みになつてからこちらを読むようにお願いします。原作を使っておりますので、残酷な表現があります。ご注意ください。

私は、男が嫌いだ
それは私が人魚姫の生まれ変わりだから

王子様？

助けた人を間違えた奴なんか、知ったこっちゃないね！

「あれ、水姫。^{ミズキ}泳ぎに行くの？」

「うん。嫌な夢見たから」

「泳ぐの、久しぶりじゃない?え~私も行こうかなあ」

「行くんじゃなくて、見にくるだけでしょ。 大体、あんた

は武光君とデートじゃないの」

「その言い方ヤメテくんない…………／＼／＼／＼」

幼い頃からの幼なじみで、無一の親友である白林 雪姫は一ヶ月ち
よつと前から王子軍団の一人、武光 利哉と付き合っている。

雪姫は白雪姫、武光はその相手の王子。

紆余曲折あって（面倒だから割愛）今では全生徒公認のバカップル。

雪姫は大体、凄く綺麗になっちゃったしね。

元々可愛い系だったのに、呪いが解けたかなんだかで、本当に白雪
姫っぽいから、勝てないとでも思つてんでしょうね。

ま、今まで障害ありまくりだったみたいだし、いーのかな。

ただ、目の前でイチャつかれると鬱陶しいけど。

「じゃ、楽しんでおいで」

雪姫の頭を一撫でして、通学鞄と水着の入った袋を持つて教室を後
にした。

「つ~やつぱ可愛いなあ

色素の薄い茶色いストレートの髪に、キリッとした姉御的な顔から、
はた目には姉が妹を撫でるようなものにしか見えないだろうが、実
際は違う。

嫌なことや嫌な夢を見たとき、水姫は人肌が恋しくなる。
でもおおっぴらに抱きつくなんて出来ないらしく、ああして少しだけ触れていくのだ。

これはまだ、私だけの特権かな

雪姫は気づいているだろ？

人肌が恋しくなつてもおおっぴらに触れることができないから、消化出来ない分を泳ぐ」とで昇華させていくことを。

パシャン

私が使う民間のスポーツクラブは、市街地のど真ん中にあるせいか、暇をもて余しているか健康の為にきているかの人が多いため、おじさん・おばさんと呼ばれる年齢が多い。

勿論、若い人もいるけど。

「ふー

とりあえず[（]の済むまで泳いだから一^日上がる[（]とした。プール場の隅には温水の小さなプールがある。

泳いで冷えた体を温めるだけのものだから、どちらかといつと温泉みたいな形をしている。

そこには先客がいた。

「水姫ちゃん、相変わらずす[（]」[（]わね。今何メートル？[（]

このスポーツクラブで何度も顔を会わせる内に仲良くなつたおばさん[（]の一人、ハ重子[（]さん。

ちょっとだけふくよかな、優しいおばさん。

知り合つたおじさんおばさんの中でも一番好きな人。

「500メートルから数えてないなあ[（]」

「あらあら。まあ私としても、綺麗なもの見せてもらつたからいいけど、あんまり無心で泳ぐと危ないわよ？」

「[（]気を付けます[（]」

どうも、私の泳ぎ方は見る人見る人、綺麗だと[（]づつ。インストラクターの人たちも、私のことを競泳選手かなんかと勘違[（]いする。

違うと言つても誘つたり勧められたりされた。

一度なんかは、どういうツテで来たのか、有名なコーチまで来たこ

ともある。

丁重にお断りして、しばらく行かなかつたな。

それからはおじさんおばさん達に言われているけれど。
八重子さんは、一度も言つたことがない。

だから一番好き。

私は泳ぐのが好きなだけであつて、争つことは嫌いだ。
自信がないからだとか、言う人もいるだらう。

だったら言つた人と本氣で勝負しよう。

本氣で泳いだら、負けない。

だつて私は人魚だもの。

「そうやつ、水姫ちゃん」

「はい？」

「私ね、息子がいるんだけれど」

「…………はあ」

「あなたと同じ高校でね、水泳部に入つているのよ」

あ、なんか嫌な予感。

「水姫ちゃんの話をしたら、会つてみたひつて言ひつのよね。勝負してみたいって」

「すいませんが、お断りします」

「そうよね、そう言ひつと思つてやめなさいつて言つたのだけれど、
諦めきれてないみたいで……」

本当に申し訳なさそつて言ひから、うう、困るなあ。

「あの子、口も上手いもんだから水姫ちゃんの名字も言つてしまつたの。だからもしかしたら直接学校で勝負を申し込まれるかもしけないわ。迷惑だつたりしつこようだつたら遠慮なく私に言つてね

？」

「わかりました。ありがとうございます

で、息子たこのお

名前は……？」

「あら、『じめんなさいね。息子は海原

かいばら

武弥とこうの

たけみ

「あれ？ 泳ぎに行つた水姫が元気ない。また勧誘受けたの？」
「ううん。それはもうスポーツクラブさんがそういうの立ち入り禁止にしてくれたから

「じゃあ、なに？」

「ちょっとね ねえ、海原武弥って知ってる？」

「え？ 海原君も王子軍団のひとりだよー」

水姫が言つには

高校水泳界で、全国大会の優勝を総なめするほどの実力を持つているらしく、将来的にもオリンピック選手でも期待の星なんだとか。しかも黒田黒髪で身体もしつかりしている上、ルックスもバツチリときた。

「よく知つてるね？」

「利哉が教えてくれた」

「ああ……王子同士、仲良いらしいのは聞いたことがある」

「…………『同志』だからね」

「え？」

「なんでもない。あ、噂をすれば」

無表情の、見る人が見ればわかる水泳選手の体つきをした男子学生が近づいてきた。

雪姫の言つていた外見と一致するからに、こ奴が海原武弥なんだろう。

「あ、ちなみに私たちの一個上だからね」

……それを早く言つてくれ。

思いつくりタメ口きくといふだつた。

「君が魚住 水姫ちゃん？」
「そうですが」

その顔で『ちゃん』付けて。

爽やかよりも厳ついから、なんか似合わない。

「母から聞いていると思うが」

「勝負のことですよね。お断りですので、さようなら」

「水姫…………」

「逃げ、と捉えても構いません。勝ち負けは嫌いなんです」

争い事は嫌い。

人魚は元来、そういう性質を持っている。

今は人間だけだ。

「また逃げるのか？」 人魚姫

そう耳元で言られて、カツと頭が熱くなつた。
確かに八重子さんの言う通り、奴は口が上手い。

私は恋の勝負から逃げた。

そして人間が持つ競争心まで煽つてきた。

「わかりました」

「じゃあ今日の放課後、待つてつから

昔々、とある海の底には人魚の国がありました
国にはお城があり、海の王さまが住んで、王さまには美しい人魚の
娘が六人いました
特に一番下の娘は誰よりも美しい歌声も持っていました
ある日、末娘は十六才の誕生日が訪れ海の上を見ることが出来るの
です
とても楽しみにしていた人魚姫は、人間に見つからないように、と
いう注意をされながら、早速海の上を目指します
海の上は人魚姫にとって初めて見る光景でした
海と違う青い空、そして人間が乗った船
人魚姫はこつそり見つからないように船に近づいて、人間を観察す
ることにしました
船の上では沢山の男たちが陽気にお酒を飲んで楽しんで、その中で

も特に目を引いたのが、誰よりも楽しそうに笑う男の人
しばし見とれていた人魚姫でしたが、突然に大嵐が吹き荒れ、船の
上はあつちへいつたりこつちへいつたり

船も大きく揺れ、津波も沢山襲いかかりました

そして一番大きな津波に、人魚姫が見とれていた男が船から放り出
されてしまい人魚姫は慌てて男を助け出しますが、その間に船は波に
流されいなくなってしまったので、人魚姫は男を抱えて岸まで運び
ました

砂浜まで引き上げて、男を確認すると、ちゃんと生きていて安心し
ました

しかしそう、他の人間の声がして人魚姫はまた慌てて海へと戻りま
した

岩陰からこつそり覗くと、やつてきた女は男を見つけ、助かつたの
だと思いました

しかし人魚姫は悲しくなりました
人魚姫は男に恋をしてしま

パタン

この後は嫌でも覚えている。

海の魔女のとこへ言つて声の代わりに足をもらつて再開する。
けれど王子は本当に助けたのが人魚姫だと知らずに別の女と結婚。
王子を殺せば人魚に戻れ、殺せなかつたら泡となつて消える。
あの人の笑顔が消えるなら、泡になつて消えたほうがマシ……な
んて殊勝な私なんだろう。
いや、そもそも殺すという行為が嫌だったからだよ。

それにしてもなんで私が人魚姫つてわかつたんだろう?
知っているのは雪姫ただ一人……
あだ名でさえつけられたことがない。

また、とも言つていたし。
まさか、アレが王子?
カナヅチだつたくせに?
嫌すぎる。

「海原くう～ん！」
「海原センパ～イ頑張つてえ
「うつわ、すつごい野次馬ギャラリーだね」
「雪姫……思つてつことと言つてつことが逆だぞ」

水泳帽に腰まである髪を詰める私の後ろにいるのは一人だけ。

「テートはどうしたんだか。

「ウォーミングアップしていくの」

「行ってら~」

パシャン

泳ぎ出してしまえばほら、雑音なんか消えていく。
ついでに雑念も。

泳いでいて、先にアップしていた奴が上がったのを見て、私も上がる。

飛び込み台に上がって、体の最終確認。
充分に体も心もモチベーションばっちりだ。

「…………なあ、賭けをしないか？」

「はあ？」

前を向いたまま、野次馬に聞こえない音量で私に言つてきた。
ヤヤラニー

賭け？

なんでそんな闘争心を煽るようなことを言つんだらう？

今回は全く動かされないけど。

「君が勝つたら、君が俺に対する不満とか言いたいこととか聞きた
いことを叶えよう」

「海原さんが勝つたら？」

「俺が勝つたら、俺の言つことを一つだけ叶えてほしい」

「それなに？」

「…………」

ただ笑うだけ。

目はすでに「ゴーグルがかけてあるから、表情が全くわからない。
まあいいか。

どうせ勝つのは私だもの。

「用意！」

ツギー！

バシャアアン！

結果？

負けるわけないでしょ。

十九秒差。

カナヅチに比べたら、随分と頑張った方よ。

「さつすが水姫！」

一番喜んでくれるのはやっぱり雪姫。
男を負かした私を引かないでくれる。

「流石、人魚姫。完敗だよ」

「魚住水姫」

「悪い。水姫、な」

「なんで下の名前……」

「君の話を聞こうか」

スルーか！

「……………」
とおりあえず、あの目をキラッキラさせてる顧問とコーチ
と部長に、絶対入らないって伝えて」

入れる気満々だよ。

暫く登校拒否したくなるくらいに。

「……………」
ポソつて言つたら、それは困る、とな。
別にアンタにや関係ないでしょ。

連れて来られたのは旧校舎の校長室。

明らかにダベる為に整頓、改造されてる。
ここが噂の王子たちの溜まり場か。

王子たち、ナニモンだ。

「好きなとこ座つて。お茶用意すっから」

「お構い無く」

「…………長い話になるだらつい」

そうかしら。

言いたいこと言つたら帰るつもつなんだけどな。

「どうも
ん

ちょっとブレイク。

意外と緊張していた体が弛緩していく。

「……………会いたかったよ」

「私は会いたくなかったわ」

「まず俺の話を聞いてくれないか?」

会いたかった、なんて言わないで欲しかった……

自國周辺を繩張りとしていた海賊を撃破し、帰りの船で宴を催していた。

また、そこら近辺は人魚が出る海域と恐れられてもいた。だが海を荒らさず、なおかつ海に目もくれず楽しく宴をすれば、人魚も楽しくなつて歌うことを忘れ、人魚の歌に惑わされず通り抜けることができると言われてもいた。

現に、一人の人魚が楽しげに見ていたことに気づいていた。

「気づいて、たの……？」

「こっちも気取られちゃたまつたもんじゃないからな、ただいるな、という認識だけだった」

そして唐突に嵐に変わり海へと放り出されてしまった。

しかし、薄れゆく意識の中、あの人魚が抱えてくれたことがわかった。

海の中で中々目を開けていることは叶わなくて、その上海に叩きつけられた衝撃でとうとう意識を失ってしまった。

「夢だと思ったんだ。人魚が人間を助けるなんて聞いたこともなかつたし、人魚は人間にあまり興味がないとも」「楽しげに見ていたのを知っていたのに？」

「全くだな……で、お前を浜で見つけたとき、まさかと思つたんだ。美しい声をしていると聞いていたのに声はなく、足があつた。他人の空似かと」

「そう、ね……魔女なんて知るはずもないものね」

「お前が消えていなくなつて、結婚した姫から聞いた。……浜で倒れていた俺を見つけたとき、海にいるお前を見た、と。消える前、枕元で泣きながら悲しそうに笑うお前が立つていたと……！」

せつして氣づいたときは何もかも手遅れで。

姫を愛していると思っていたが、そうではなかつた。

本当は、頬をそつと染めて笑う、名も無き少女に惹かれていたことを。

「沢山探したよ………五回も生まれ変わつてもお前を探していた。
けど見つけたとき、お前はこくつも歳上で、すでに別の男と幸せやうに笑つていた……」

「お前がどれだけ苦しんだかわかつたよ。一生をかけて、償いを
させてくれ。お前を愛しているんだ」

一人掛けののソファーに座つて いる私を逃がさないように 四肢を 使つて 困んで いる。
私に、触れず に。

「…………嫌…………よ…………」

苦しそうに 垂む。

でも、その 気持ちが 嫌な のだ。

「 償いの 気持ちで…………一緒に いられたくないわ」

「 愛して くれるだけ でいい のよ
」

でも、本當に いい の？

笑顔に 惹かれた だけの 私が、 どうして いい の？

「俺だつて お前の 笑顔に 惹かれた んだ。 むしろ、 お前の こと を 気づかなかつた俺でいいのか？」

「名前…………名前を 読んで？」

「水姫、 水姫、 水姫…………愛して るんだ！」

「ああ…………貴方 に 本當の 名前を 呼んで 欲しかつたの」

「何度だつて 呼んで やる。だから、 水姫も 本當の 声で 俺を 呼んで……」

……

「武弥 愛してゐる」

無理矢理低い声を出していた。
聞かせたかつた人が居なかつたから。

「「千年前から、愛してゐる」」

千年越しのすれ違いが、今
ようやく寄り添う

End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8166u/>

人魚姫の生まれ変わり

2011年10月9日10時56分発行